

認知症を診る医療機関を全道に！ より良い地域を創るのが社会の仕組み

できることはできるうちにやる

先日、認知症の治療実践の第一人者である先生の講演を聞いて感じるところが多かった。最近人の名前を覚えられなくなったたり、あれだのこれだの言っているが、65歳を過ぎて年齢に比例して認知症の患者は倍増していくと聞いては、誰しも逃れようがなくいつかは訪れる運命と覚悟せざるを得ない。

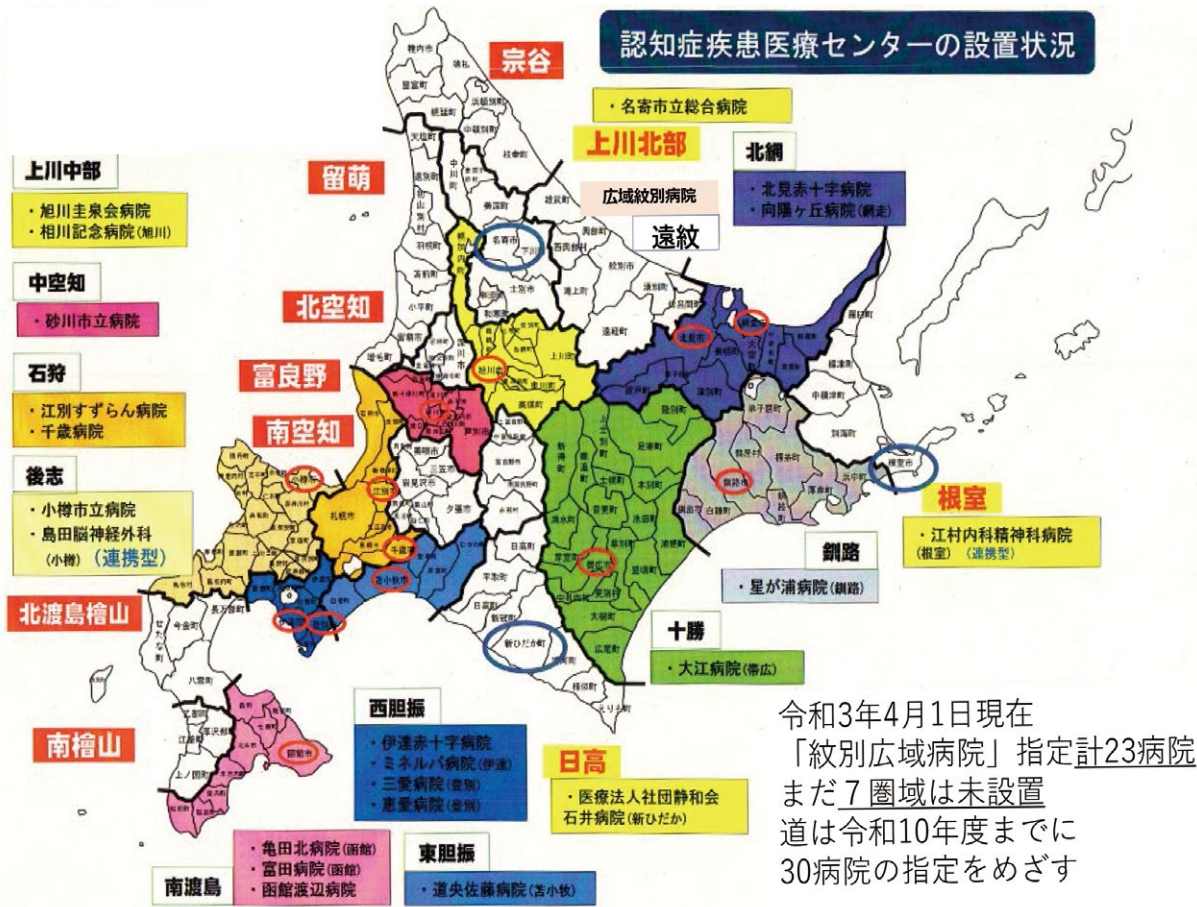
どこから軽度でどこから病名がつくかは検査しないとわからないが、どうも最近怒りっぽくなったたり、喧嘩っ早くなったのはこのせいだ、性格か。この歳になっていつ癌になるか、脳卒中で倒れるか、心臓発作が起こるか心配しているが、加えてある日から親しい人の名前もわからなくなる。やはりや

るべきことは出来るうちにやらないで後悔する。というところで本連載もますます歯に衣着せぬものになっていくがご容赦を。

認知症疾患医療センターの不在

認知症患者を抱える家族や夫・妻の夫婦介護、明らかにおかしな兆候がありながら、普段の生活をしている家庭。この診断をして検査してアドバイスをするのが認知症疾患医療センターで、医療だけではなく、介護関係者を含め地域全体で支える仕組みづくりの役割を担っている。

ちょうどこの勉強会の日にはアルツハイマーに効果があるとされる新薬の認可が出たというニュースが流れたが、この薬の治療を受けられる医療機関は少な



令和3年4月1日現在
「紋別広域病院」指定計23病院
まだ7圏域は未設置
道は令和10年度までに
30病院の指定をめざす

▲北海道内の認知症疾患医療センター(講演会資料より)

危機管理コンサルタント 越智文雄の 時論・持論・自論



<第17回> 認知症の勉強会で感じたこと



▲認知症の症状の理解(砂川市立病院作成・講演会資料より)

驚いたことに、全国政令指定都市の中で札幌市だけが、ひとつも認知症疾患医療センターを設置していない。人口比ならば区に一つはあってもよい機関連である。

道内の主要都市では、旭川も釧路も帯広も函館も認知症疾患医療センターがあり、地域の患者に対処している。人口1万5000人台の砂川市立病院にも立派な同様のセンターがあり空

知の地域医療に貢献しているのに、人口200万人に近い札幌市に認知症を専門に診る認知症疾患医療センターがないのは。

オリンピックを招致する財政力と行政力のある札幌市がなぜ認知症疾患医療センターを持っていないのか。

オリピックを招致する財政力と行政力のある札幌市がなぜ認知症疾患医療センターを持っていないのか。これはどう見ても行政の不作为で厚生医療担当者の本来業務のサポートには関係ない。新型コロナウィルスではあれほどの過剰な対策をこれでもかと打っているのに、すべての市民、道民が必ず通るだろう認知症には備えようとしない危機意識の不在はなにか。

現実には方策が実践されて専門家も家族の会も訴えているのに、聞こえないとしたらそれは組織としての認知能力、判断力が欠落しているからではないのか。鈴木直道知事も秋元克広市長も最優先課題として来年度予算に組み込むべきである。

道議も市議も誰ひとりとして反対する人はいないはずである。みんな当事者なのだから。

もしかして組織としての軽度認知症

もの忘れ、判断力の低下、気力の低下、認知の低下。これが会社組織、法人の病気になる。自治体の公共サービス、行政政策の中にもこのような症状は隠れていないか。

やりたくない病、責任取れない病、縦割り病は、古くから言われている公務員組織によく見られる病気である。新人のときには希望に溢れていたのだ

から歳とともに侵される軽度認知症の一種だろうか。

優先政策の選択、実効ある施策の立案、現実を見つめた議論を議論する議会、リーダーシップを持って行政執行する首長。アンテナを張り全国の最新の取り組みを勉強する意欲と能力はあるか。わかっているならは罪はみぬふりをしていなければ罪は深い。

政治家も議員も行政もその役割を果たして、より良い地域を創るのが社会の仕組みではないのか。

民間企業も製品の製造やサービスの提供で社会に貢献し経済と雇用を維持していく。メディアも本来の役割を果たし必要な情報を正確に詳しく地域に提供する。偏向することなく、地域の課題を掘り下げ提起していく。

大学、研究機関はさらに専門的課題を掘り下げて社会の発展をリードする。別に理想の世界

ではなく当たり前の世界である。青臭く子どもに帰るのも軽度認知症だろうか。

■妄想・狂気の国

ロシアのプリゴジンの乗った家用ジェットが落とされたという。誰がみても独裁者プーチンに反逆したことへの制裁処刑だが、これは正気の国が行う判断だろうか。

元々、政治的ライバルを放射線物質で暗殺してきた指導者で、隣国に攻め込み民衆を処刑し掠奪、強姦を許す国である。これは政府も議会もメディアも軍隊も狂気の中にある国としか言いようがない。

認知症などという世界ではなく、妄想、幻視を見て徘徊し暴力をとめられない重症な病人国家である。それが北海道のすぐ隣にいる。

ウクライナ侵略からほどなくロシアの元議長が北海道はロシアの領土であると妄言を吐いた。

彼の頭、もしくはロシアの頭には、江戸時代に樺太から拉致したロシア国民である少数民族が北海道で迫害され続けているという妄想があり、太平洋戦争後に条約を無視して攻め込み、もうひと息で北海道の釧路・留萌を結ぶ北半分を侵略できたとの誇大認知が未だにあるのかもしれない。

前号で週刊『ビッグコミック』に連載されている『空母いぶき』に注目して欲しいと書いたところ同感の声を多く聞いた。同誌の先週の号では、松輪島、択捉島、国後島と米軍機が威力低空飛行を行い一触即発の危機で、千歳空港、釧路空港、函館空港から道民が逃げ出すシーンも描かれている。

所詮マンガだからと言う人もいる。しかし、北海道で役割を持つ人たちは、考えるべき優先事項の上位に位置つけて欲しい。私たちの世代で初めて起こっている北海道の直面しているいまここにある危機なのだから。

■不安にかられるのも軽度のうち

沖縄で台湾有事も尖閣問題も、いまある危機でだれもナンクロナイサアとは言わない。政治と行政のトップと危機管理の世界の人間はせめてありえることは考えていただきたい。

自衛隊はあり得ないことを考えるのだと北部方面総監に聞いた。だからといって安心などできない。不安にかられるのも軽度のうちだろうか。

「札幌なにかができる経済人ネットワーク」は、北海道愛を持って熱い思いでなにかを実現していこうという有志の勉強会です。過去180回の例会はホームページをご覧ください。(検索)札幌なにかができる)

(筆者略歴)
株あかりみらい代表取締役。北海道大学卒業後、北海道電力入社。電気事業連合会企画部副部長、北海道洞爺湖サミット道民会議事務局次長、北海道経済同友会などを歴任。電力業界で初代の危機管理担当室長の経験から自治体・企業へのアドバイザーとして活躍。環境・エネルギー問題の専門家。(一社)次亜塩素酸水溶液普及促進会議代表理事、日本除菌連合の会長を務める。札幌なにかができる経済人ネットワーク主宰。